『オリエント』第57巻第1号抜刷
2014年9月30日発行

イブン・アル＝フワティーの伝える13世紀後半の集団イジャーザ
——バグダード・メッカ間およびバグダード・ダマスクス間の事例から——

水 上 遼

2 0 1 4

日本オリエント学会

イブン・アル＝フワティーの伝える13世紀後半の集団イジャーザ
 ——バグダード・メッカ間およびバグダード・ダマスクス間の事例から——

The Group *Ijāza* Referred to by Ibn al-Fuwaṭī in the Late 13th Century:
 Connections between the Scholarly Communities in Baghdad,
 Damascus and Mecca

水 上 遼^{*}
 MIZUKAMI Ryo

ABSTRACT This paper discusses the “group *ijāza*,” a special kind of *ijāza* (permission) of transmission sent from a group to a person or to another group without a direct contact between the conferring and conferred parties, and examines its meanings and social background. This group *ijāza* is referred to as “*ijāza jāmi‘a*” in the *Majma‘ al-ādāb fī mu‘jam al-alqāb*, an Arabic biographical dictionary written in early 14th-century Baghdad by the Baghdadi scholar, Ibn al-Fuwaṭī (1244-1322).

Ibn al-Fuwaṭī refers to the requests and conferments of group *ijāzas* that took place between Mecca and Baghdad and between Damascus and Baghdad. Meccan scholars sent a group *ijāza* from Mecca to Ibn al-Fuwaṭī in 1280/81 through an intermediary, a Baghdadi friend of Ibn al-Fuwaṭī. The conferrers included a member of the famous Meccan Ṭabarī family. Groups of Damascene scholars and notables repeatedly sent group *ijāza* requests to Baghdad between 1288 and 1299. In these requests, they asked not only Ibn al-Fuwaṭī but also probably other Baghdadi scholars to confer *ijāzas* on their children. The names of 150 Damascene children were written in a group *ijāza* request dated 1296/97.

The group *ijāza* was an effective means of collecting *ijāzas* from distant cities. Although the ulama had ceased to travel widely in pursuit of knowledge by the late 13th century, they maintained their intention to get *ijāzas* from ulama in distant scholarly centers. The group *ijāza* could be substituted for a studying trip. It contributed to the formation and perpetuation of the intellectual elite class of a city since only some specific ulama families had access to it. The exchange of *ijāzas* between Baghdad and Damascus in the late 13th century indicates that a close social connection existed between the two cities.

I. はじめに

免状、許可証などと訳されるイジャーザ（*ijāza*）とその授受は、前近代イスラームにおけるウラマーの教育・学術活動の一環である知識の伝承のプロセスとして、長く研究者たちに注目されてきた。イジャーザとは、特定のテキストまたは特定の著者の作品群に関してある者にその伝承の許可を与える場合や、送り手が受け手の持つ何らかの知識や技能を正しいと認める場合などに出される文書のことである。イジャーザは様々な学問的知識、技芸の伝承の際に書かれたが、本稿で主に論じる、ウラマーによる知識の伝承のためのイジャーザは、特に知識の伝承の方法を検証するハディース学上の議論と密接に結びついていた。ハディース学分野におけるイジャーザとは、ハディースを書面に書き、同時にそこに伝承許可を記したものを手渡す、というハディース伝承の方法を指す。⁽¹⁾以下本稿では特に断らない限り、イジャー

* 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
 Graduate Student, Graduate School of Humanities and Sociology, the University of Tokyo

ザとはこの知識の伝承許可を指すものとする。

これまでの研究において、イジャーザの授受は基本的に、ハディース学上理想的とされる、師弟間でのハディースの対面教授の結果として与えられるものと考えられてきた⁽²⁾。そのため、対面教授を伴わない状況で発せられるイジャーザに関しては、その存在自体は繰り返し指摘されてきたものの、非現実的な形態での伝承などと考えられてきた。そして、そうした対面教授を伴わないイジャーザがどのような手段や背景によって発せられるのかに関しては、これまでの研究では主たる関心とされてこなかった。

本稿では、こうした対面教授を伴わない状況で発せられるイジャーザの役割を考察する手がかりとして、イルハン朝下で活躍した学者イブン・アル＝フワティー（Kamāl al-Dīn ‘Abd al-Razzāq b. Aḥmad al-Baghdādī Ibn al-Fuwaṭī, 1244-1322）の伝える、13世紀後半のバグダードと、メッカ、ダマスカスの間で、面識のないものたちが集団で交わす多対一、または多対多のイジャーザの事例を紹介する。そして、その手段や社会的背景を考察する。こうしたイジャーザは、史料中では単に「イジャーザ」と表記されるほか、「イジャーザ・ジャーミア（ijāza jāmi’a）」と表記されることもある。ジャーミアというアラビア語は「集めた」「まとめた」などを意味する。イジャーザの送り手・受け手の複数性や、アラビア語の意味合いから、本稿ではこうした多対一、多対多のイジャーザを総称して集団イジャーザと呼ぶこととする。

集団イジャーザの事例を紹介する前に、ハディース学分野での知の伝承におけるイジャーザの社会的役割について概観しておこう。前述のとおり、ハディースの伝承は、シャイフとの対面教授によって行われることが理想的と考えられていた。そのため、ハディース学者たちはしばしばハディースを集めるために広大な地域を旅し、シャイフからの対面教授と口承によってハディースを学んでいた（湯川1990；森山2007）。しかし、ハディース学の発展を論じたゴルトツィーハーは、ハディース伝承の方法としてイジャーザが11世紀ごろまでに広く行われるようになったとし、さらに、そうしたイジャーザを伴うハディース伝承の中には、シャイフとの間に面識のない年少者や遠隔地の人物に対しても、請求に応じてイジャーザが出される場合があったとしている（Goldziher 1971, 175-180）。

イジャーザの授受がハディース伝承の方法として普及すると、教育・学術活動のあり方もそれに応じて変化していった。そもそもハディースは、より質の高いイスナードを持つハディースを手に入れるために、特に若年期のウラマーが集中的に学ぶことが好まれ、これがウラマーの学問的キャリアの一環となっていた⁽⁵⁾（Bulliet 1983；Berkey 1992, 32-33）。バグダードを中心とするウラマー社会を論じたエファットは、14世紀までに、学生たちは自分の学問的キャリアを示すために著名な法学者たちからできるだけ多くのイジャーザを獲得しなければならなくなったと論じている（Ephrat 2000, 102-103）。また、マム

（1） ハディース伝承手段としてのイジャーザに関しては、Goldziher 1971, 175-180；Vajda 1975；Makdisi 1981, 140-146；阿久津 2010, 251-255 を参照。

（2） ハディース学においては、伝えるハディースを持つ人物、すなわちシャイフ（shaykh）との対面教授のもと、ハディースを直接「聞くこと（samā’）」と、覚えるべきハディースを「読み上げること（qirā’a）」とが理想的な伝承方法とされていた（Vajda 1975）。

（3） 例えば、バーキーは年代的・地理的に重ならない師弟間でイジャーザが授受されることを、架空の伝承とみなしている（Berkey 1992, 31-32）。

（4） ハディース伝承の際のイジャーザの有効性については、ハディース学者イブン・アッ＝サラーフ（Ibn al-Ṣalāḥ, 1181-1245）が、伝承される人物とテキストが明確であるかという観点から論じている（*Muqaddima*, 192-202；*Introduction*, 109-118；Robson 1960-61, 471-472）。

（5） 若年期にハディースを学ぶことが積極的に行われた背景には、預言者ムハンマドから当人に到るまでに経ている人物の数がより少ないことが、より良い伝承の鎖（isnād）とみなされる理由の一つとなっていたことがあった（Bulliet 1983, 115-116）。

ルーク朝下のエジプトやシリアでは、若年期の学者たちが自分自身のために、または学者たちが自分の子弟のために、数多くのイジャーザを手に入れようと、イジャーザの請求を繰り返していたことが知られている (Berkey 1992, 31-32; Chamberlain 1994, 88; Stewart 2004, 51)。ウラマーが若年期にイジャーザを数多く集めることは学問的キャリアのために重要なことであった。

従って、本稿で13世紀後半の事例を扱うにあたり、前提として次の2点を指摘できるだろう。一つ目は、知識の伝承の一つの方法として、対面教授を伴わずにイジャーザの授受が行われていた、という点である。二つ目は、それと同時に、若年期のウラマーの学問的キャリアの構築ために、多数のイジャーザを集めようとする風潮が存在していた、という点である。

II. イブン・アル＝フワティーについて

集団イジャーザの事例を伝えるイブン・アル＝フワティーは、1244年にアッバース朝最末期のバグダードで生まれ、その後イルハン朝下のマラーガ、次いでバグダードで活動した学者で、特に歴史家、ハディース学者として同時代から知られていた人物である。彼には10を超える著作があったとされ、本稿で扱う人名録である、『ラカブ辞典におけるアダブの集成 (*Majma' al-ādāb fī mu'jam al-alqāb*)』(以下、『ラカブ辞典』とする)はそのうちの一つである。⁽⁶⁾『ラカブ辞典』は、伝記事項を記載人物のラカブ (laqab) すなわち尊称のアラビア文字順で配列した人名録である。『ラカブ辞典』には、預言者ムハンマド以降、イブン・アル＝フワティーの時代に至るまでの様々な学者、文人、為政者などが記載されており、彼の同時代人や彼と面識や交流のあった人物も数多く記載されている。そのため、イブン・アル＝フワティー自身の学術活動を考察する上でも有効な史料となる。

前述のとおり、イブン・アル＝フワティーはイルハン朝下で生きた学者であった。彼について伝えるザハビー (Shams al-Dīn Muḥammad al-Dhahabī, 1274-1348 or 1352/53) の人名録によれば、彼はバグダード陥落後に一時モンゴル軍の捕われの身となっていたが、しばらくして解放され、1261/62年ごろに、当時天文学などの分野でイルハン朝君主から学術事業を任されていたナスィールッディーン・アッ＝トゥーサー (Naṣīr al-Dīn al-Tūsī, 1201-74) に師事した。このころから、イブン・アル＝フワティーはナスィールッディーンのもとで当時学術拠点となっていたマラーガに滞在するようになった (*al-Huffāz*, Vol. 3, 1493)。ナスィールッディーンの死後、『ラカブ辞典』の記述によれば、1280/81年または1281/82年に、今度はイラク中南部 (‘Irāq al-‘Arab) を統治していたアターマリク・アル＝ジュワイニー (‘Aṭāmalik al-Juwaynī, d. 1283) に招かれ、故郷バグダードに帰った。⁽⁸⁾その後は1322年に没するまで、基本的にバグ

(6) イブン・アル＝フワティーの生涯と経歴、著作活動の概要については、イクバル、シャビービー、ジャワード、ワイスマン、デウィース、クラヴルスキーらによって論じられてきた (Iqbal 1937; al-Shabībī 1950, Vol. 1, 3-19; *Talkhīs*, Vol. 1, 9-52 (intro.); Weissman 1990, 14-16; DeWeese 2006; Krawulsky 2011, 120-122)。しかし、彼の生涯の詳細や学者たちとの交流に関しては十分に検討されているとは言い難い。この問題に関しては別稿にて論じたい。

(7) 『ラカブ辞典』のまとまった校訂本は二つ存在する。一つは、ジャワードが1960年代にダマスカスの手稿本を校訂したもので、アイン (‘ayn) で始まるラカブの「イZZ (‘izz)」からカーフ (qāf) で始まるラカブの「キワーム (qiwām)」までを含む (*Talkhīs*)。もう一つは、ジャワードの校訂と、イギリス植民地期インドの学者カーズィミーが、ラーホールの手稿本を校訂したものとをあわせて、カーズィミーが一つにまとめた校訂本である (本稿での略号: *al-Alqāb*)。カーズィミーによるラーホールの手稿本の校訂は、ラーホール大学のウルドゥー語雑誌『オリエンタルカレッジ・マガジン (*Oriyantal Kālīj Maigzīn*)』に、1930年代から50年代にかけて連載されたものであったが、カーズィミーはジャワードの校訂本とともにそれらをまとめたのであった。カーズィミーの校訂本はジャワードのもの部分に加え、ミーム (mīm) の「ムワフファク (muwaffaq)」までを含む (DeWeese 2006, 11-12)。

(8) イブン・アル＝フワティーがバグダードに戻った年については、『ラカブ辞典』中で、ヒジュラ暦678年 (1279/

ダードで暮らしたと考えられる。また、生涯の間、何度かタブリーズやスルターニーヤなどイラン高原北西部の諸都市に旅行していた。⁽⁹⁾このようにイブン・アル＝フワティーの行動範囲はイルハン朝下のイラク中南部やイラン高原北西部に限られており、それ以外のシリアやエジプト、ヒジャーズ地方などに行ったという記述はみられない。しかし、後述するように、彼が赴いたことのない地域から彼のもとへと、集団イジャーザが送られてきていた。

III. イブン・アル＝フワティーの伝える集団イジャーザ

1. メッカからの集団イジャーザ

『ラカブ辞典』の現存部分中では、メッカの学者たちが集団でイブン・アル＝フワティーに対してイジャーザを出したと考えられる記述が1か所存在する。これは、当時のメッカの有力家系であるタバリー家のハディース学者マジドッディーン・アブドッラー・アッ＝タバリー (Majd al-Dīn ‘Abd Allāh al-Tabarī, 1232-92) についての伝記事項の中にみられ、そこには次のように記されている。⁽¹⁰⁾

彼は〔ヒジュラ暦〕679年(西暦1280/81年)に〔メッカの〕高貴なる聖域(al-Haram al-sharīf)から我々のためにイジャーザを書いて〔送って〕くれた。彼は一団の中の一人として私にイジャーザを与え(ajāzani fī jamā’a), 彼はそれを集団イジャーザの中に書いた(katabahā fī al-ijāza al-jāmi’a)。このことに関する仲介者(safir)は、我々がシャイフ、証言の正しき人物(‘adl), 信頼できる者(thiqa)である、クルアーン朗誦者にしてハディース学者のラシードッディーン・アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・ブン・ウマル・ブン・アブー・アル＝カースィムであった。(al-Alqāb, Vol. 4, 437)

ここでは、マジドッディーン・アブドッラー・アッ＝タバリーと彼を含む「一団」がイブン・アル＝フワティーに対し一度にイジャーザを送ったことが記されている。また、その際に、ラシードッディーン・ムハンマドという人物が仲介者となっていることもわかる。イジャーザが送られた1280/81年は、前述のとおりイブン・アル＝フワティーがバグダードに戻ったとされる年である。彼がこのイジャーザを受け取った場所がバグダードであったかどうかは明記されていないが、『ラカブ辞典』の現存部分中では、イブン・アル＝フワティーがこの年、バグダード以外で活動していたという記述はない。⁽¹¹⁾そのため、このイジャーザを彼が手にした場所はバグダードであった可能性が高い。

『ラカブ辞典』中のこの伝記事項には、イブン・アル＝フワティーとマジドッディーン・アブドゥッ

80年)と記されている箇所(al-Alqāb, Vol. 3, 475-476; Vol. 5, 243-244 など)と、679年(1280/81年)と記されている箇所(al-Alqāb, Vol. 1, 317-318; Vol. 2, 69 など)が併存しており、どちらか定かでない。

(9) イブン・アル＝フワティーがタブリーズにいたことは、ヒジュラ暦657年(al-Alqāb, Vol. 4, 457), 664年(al-Alqāb, Vol. 1, 291 など), 665年(al-Alqāb, Vol. 1, 84-85 など), 669年(al-Alqāb, Vol. 3, 62), 670年(al-Alqāb, Vol. 5, 10), 673年から675年(al-Alqāb, Vol. 4, 498, 157, 443 など), 677年(al-Alqāb, Vol. 2, 315-316 など), 704年から707年(al-Alqāb, Vol. 2, 132 など; 556-557; Vol. 3, 220 など; Vol. 1, 151-152 など)の記述にみられる。一方、スルターニーヤにいたことは、ヒジュラ暦706年(al-Alqāb, Vol. 2, 385-386), 707年(al-Alqāb, Vol. 3, 515-516), 710年(al-Alqāb, Vol. 3, 11), 716年(al-Alqāb, Vol. 3, 487 など), 717年(al-Alqāb, Vol. 4, 526)の記述にみられる。

(10) タバリー家については、Bauden 1995 に詳しい。

(11) 『ラカブ辞典』の現存部分の記述によれば、イブン・アル＝フワティーはヒジュラ暦677年(1278/79年)にタブリーズにいたが(al-Alqāb, Vol. 2, 315-316 など), 678年から680年までバグダードにおり(al-Alqāb, Vol. 5, 243-244 など; Vol. 1, 317-318 など; Vol. 1, 182-183 など), 681年(1282/83年)にはヒッラとクワファにいた(al-Alqāb, Vol. 1, 354-355 など; Vol. 4, 464 など)。

ラーが直接面会していたと思われる記述はない。メッカの学者ファースィー (Muḥammad b. Aḥmad al-Fāsī, 1373-1429) が15世紀初頭に著した人名録『貴き首飾り (*al-Iqd al-thamīn*)』にも、このマジドッディーンは登場するが、彼がイラクを中心としたイブン・アル＝フワティーの活動領域を訪れたという記述はない (*al-Iqd*, Vol. 5, 267-279)。これらのことから、イジャーザ送付の前に両者の間に対面教授はなかったと考えるのが妥当であろう。そして、この両者を繋いだのが仲介者のラシードッディーン・ムハンマド (Rashīd al-Dīn Muḥammad, d. 1307) であった。この人物はハンバル派に属するバグダードの学者であり、イブン・アル＝フワティーは彼の講義を頻繁に聴いていた。⁽¹²⁾ただし、ラシードッディーン・ムハンマドがメッカを訪れたという記述は諸史料中に見当たらないため、彼がメッカに実際に行き、マジドッディーンに会ったかどうかは不明である。また、ラシードッディーンがさらに別の人物に仲介や書簡の送付を頼んだ可能性もあるだろう。

上記の集団イジャーザの送付と同年のヒジュラ暦679年に、上述のマジドッディーンの従兄弟で、同じくタバリー家に属する学者のムヒッブッディーン・アフマド・アッ＝タバリー (Muḥibb al-Dīn Aḥmad al-Ṭabarī, 1218-95) から、イブン・アル＝フワティーのもとにイジャーザが送られている (*al-Alqāb*, Vol. 5, 6-7)。⁽¹³⁾ただし、この記述では、送付に際して集団が関与したとは書かれておらず、またそれを仲介した人物も別人である。⁽¹⁴⁾従って、この送付が集団イジャーザとどのような関係にあるのかは判然としない。少なくとも、同じ年に同じ家系に属する人物からイジャーザが送られたことは、二つの送付の事例の間に何らかの関係性をうかがわせる。

2. ダマスカスからの集団イジャーザ：150人の息子たちからの「イジャーザ」

メッカからの集団イジャーザが『ラカブ辞典』の現存部分中で1件しか見られないのに比べ、ダマスカスとバグダードの間の集団イジャーザについては、いくつかの伝記事項にその記述が存在する。そして、その規模や方法はメッカからの集団イジャーザに比べて大規模かつ複雑であった。『ラカブ辞典』中のダマスカスのハディース学者アラムッディーン・サンジャル (‘Alam al-Dīn Sanjar) の伝記事項には、1296/97年 (ヒジュラ暦696年) にダマスカスからイブン・アル＝フワティーのいたバグダードに送られてきた「イジャーザ」を記す、次のような非常に興味深い説明がなされている。

150人 (の名前) を含む集団イジャーザ (al-ijāza al-jāmi‘a al-mushtamila ‘alā mi‘a wa-khamsīn insānan) が [ヒジュラ暦] 696年にダマスカスから平安の都 (バグダード) に送られてきたとき、その中に大アミールにしてハディース学者アラムッディーン・サンジャル・ブン・アブドゥッラー・アッ＝ダワーダーリー・アッ＝サーリヒーの息子アイユーブの記述があった。私はそこに [自身の名前を] 書いた (katabtu fihā)。(*al-Alqāb*, Vol. 1, 523)

(12) ラシードッディーン・ムハンマドがイブン・アル＝フワティーにハディース等を口述して伝承している記述は『ラカブ辞典』やその他の史料にみられる (*al-Alqāb*, Vol. 1, 116-117; Vol. 4, 207; Vol. 5, 100, 407; *al-Islām*, Vol. 53, 4)。

(13) ムヒッブッディーン・アフマド・アッ＝タバリーは13世紀メッカで最も有名なハディース学者、歴史家の一人。多数の著作を残した (*al-Iqd*, Vol. 3, 61-72; Bauden 1995, 261; *Trésors*, 1-5 (intro.))。

(14) ムヒッブッディーンの伝記事項には、「アブー・バクル・ブン・ウスマーン・アル＝マラーギーの手で (‘alā yad)」イジャーザがイブン・アル＝フワティーに送付されたと記されており、この人物が仲介者であったことがわかる。しかし、他の史料に彼についての情報がなく、詳細は不明である (*al-Alqāb*, Vol. 5, 6-7)。

この伝記事項は上述のとおり、アラムッディーン・サンジャルについてのものであるが、その本文中に彼自身の経歴等は記されていない。記されているのは、「イジャーザ」に含まれる150人の名前のうちの一人が、彼の息子アイユブであったということ、そしてイブン・アル＝フワティーがそれへの対応として自身の名前ないしは「イジャーザ」の文言をそこに書いたということだけである。また、イマードッディーン・ムハンマドという人物の伝記事項には、この「イジャーザ」に関する別の側面が記されている。

識者たち、学者たち、貴顕たち、法学者たちの息子たちの記述を含む集団イジャーザ (al-ijāza al-jāmi'a al-mushtamila 'alā dhikr awlād al-afāḍil wa-l-'ulamā' wa-l-akābir wa-l-fuqahā') が696年にダマスカスから平安の都に送られてきたとき、その中に既述のイマードッディーンの2人の息子アリーとムハンマドの記述があった。私はそこに「[自身の名前を]」書いた。神の御蔭で。(al-Alqāb, Vol. 2, 152-153)

先ほどのアラムッディーンの伝記事項で「150人」となっていた部分が、ここでは「識者たち、学者たち、貴顕たち、法学者たちの息子たち」と言い換えられているが、内容の類似性からも二つの伝記事項は同じ出来事を記しているとみて間違いなからう。

では、これらの伝記事項で述べられている集団イジャーザとは何であろうか。二つの伝記事項の両方において、集団イジャーザにはダマスカスの有力者の息子の名前が記されていた。ここで言及されている息子らはいずれも、アイユブやアリー、ムハンマドといったイスマ（本名）のみで呼ばれ、父親と異なりラカブや地位などは何も記されていない。従って、これらの息子は、この時点でまだ年少者であったと推測される。

従って、字面どおり解釈すると、ダマスカスの学者・貴顕たちの息子ら150人がイブン・アル＝フワティーに送ったイジャーザであったことになるが、これは非常に奇妙である。1296/97年当時、イブン・アル＝フワティーは既に50歳を超えており、年少者たちからイジャーザを得ていたとは考えにくい。

この集団イジャーザの性格を考える上で重要なのは、二つの引用部分の最後の部分で、「私はそこに「[自身の名前を]」書いた (katabtu fihā)」と訳した部分であろう。この部分の字形は「私はそこに書かれていた (kutibtu fihā)」と受け身で読むことも可能であり、その場合は150人の年少者たちがイジャーザの送り先としてイブン・アル＝フワティーの名を書き、彼にイジャーザを授与した、という不自然な文章になる。従って、ダマスカスから送られてきたのは集団による「イジャーザ請求 (istijāza/istid'a)」であり、イブン・アル＝フワティーはそれらを許可する意味で「そこに「[自身の名前を]」書いた」のだと解釈すべきである。

また、イジャーザ請求の対象となった人物についても注目したい。上述の二つの引用箇所では、いずれもイジャーザ請求はイブン・アル＝フワティー個人に送られたとは記されず、「ダマスカスから平安の都に送られてきた」のであり、そのイジャーザ請求の紙にイブン・アル＝フワティーが署名したのであった。150人分ものイジャーザ請求がイブン・アル＝フワティーのみを対象に送られたとは考えにくい。むしろ、このイジャーザ請求はバグダードの学者たちの集団を対象にしており、イブン・アル＝フワティーはその内の一人であったとみなすべきであろう。すなわち、ダマスカスの学者、貴顕たちが、バグダードの学者たちの一人であるイブン・アル＝フワティーに対して、彼らの子供のために集団でイジャーザ

を請求していた。そして、イブン・アル＝フワティーはその請求を承認する意味でその紙に自身の名前を書き、それを送り返すことで、その息子たちにイジャーザを与えていた。このように解釈すると、上述の二つの伝記事項の記述は問題なく理解できる。

『ラカブ辞典』の現存部分の中には、この出来事の同年に、ダマスクスから自身の子供のためにイジャーザ請求を行ったことが記されている伝記事項を他に3件見つけることができる (*al-Alqāb*, Vol. 2, 128; Vol. 3, 11; Vol. 5, 51)。この3件についても、請求の年や性質が同じことから、150人の息子たちのためのイジャーザ請求の内の一部であった可能性が高い。⁽¹⁵⁾ さらに、1288/89年(ヒジュラ暦687年)と1298/99年(ヒジュラ暦698年)にダマスクスから送られた計4件の「イジャーザ」もまた、1296/97年のものと類似した特徴を持つ。これらはいずれもダマスクスからバグダードへ向けて、すなわち都市から都市へ送られたものであり、送付先としての個人名は明記されていない。また、そこにダマスクスの住民であった人物の子供の名前が書かれていた (*al-Alqāb*, Vol. 1, 240; Vol. 2, 9, 455-456; Vol. 3, 83)。これら4件の記述に関しても、請求を行ったダマスクス側の人々の規模は定かでないものの、1296/67年のものと同様の性質を持つ、集団によるイジャーザ請求であったと考えられる。すなわち、ダマスクスからバグダードへの集団イジャーザ請求は、1288/89年、1296/97年、1298/99年と繰り返し送られていたのであった。

『ラカブ辞典』の現存部分中において、逆にバグダードからダマスクスに請求された集団イジャーザの事例を確認することはできない。イブン・アル＝フワティーは上述の集団イジャーザ請求の事例とは別に、6つの伝記事項の中でダマスクスの学者からイジャーザを送ってもらったことを記している。これらのイジャーザが送られた年は1281/82年、1283/84年、1284年であり、いずれも上述のダマスクスとの間の集団イジャーザよりも早い時期である。⁽¹⁶⁾ 従って、イブン・アル＝フワティーは1284年まではダマスクスの学者たちからイジャーザを得る側であり、1288/89年以降は与える側になっていたようにみえる。イブン・アル＝フワティーがダマスクスからイジャーザを集団イジャーザという手段で獲得していたのかは不明である。しかし、1283/84年には2名、1284年には3名の人物からイジャーザが送られていることから、ダマスクスからバグダードへも集団イジャーザが送られていた可能性はあるだろう。

これまでの伝承のイジャーザに関する先行研究では個人間での授受が前提とされていた。⁽¹⁷⁾ しかし、一つの都市の住民たちが彼らの150人もの子供たちのために、イジャーザ請求を別の都市の学者たちに送る、というこの事例はイジャーザ授受の大規模化、集団化という点で非常に重要な出来事である。同時に、こうした大規模な集団イジャーザの存在は、13世紀後半におけるバグダードとダマスクスの都市間の結びつきを示していると言えよう。

3. 集団イジャーザの背景

こうした集団イジャーザが交わされた背景にはどのような状況があったのだろうか。史料中に関連する記述は多くないが、ここでは可能な限り検討してみたい。まず考えられるのは、集団イジャーザは、13世紀ごろの西アジア各地の都市の間を飛び交っていた、面会を伴わないイジャーザ授受の効率化とし

(15) ただし、この内の *al-Alqāb*, Vol. 3, 11 においては、イジャーザに含まれる人物の数が160人となっている。それ故、ヒジュラ暦696年の集団イジャーザに含まれていた人数が150人なのか160人なのかは定かではない。実際にはこれらの数字に近い人数であっただろうと推測できる。

(16) 1281/82年のものは *al-Alqāb*, Vol. 2, 320-321, 1283/84年のものは *al-Alqāb*, Vol. 1, 505; Vol. 2, 319, 1284年のものは *al-Alqāb*, Vol. 4, 204, 235, 553 に記載されている。

て位置づけられる、という点である。森山が論じるところによると、広範囲を旅してハディースを求める行為は、特に人や情報が集まるバグダードなどの中心的都市において、10世紀から12世紀にかけてその重要性が低下していった（森山 2007）。森山はその背景として、ハディース学者の再生産・活動・評価が特定の地域内部で充足するようになった点を指摘している（森山 2004; 森山 2007, 98-101）。本稿で提示した集団イジャーザは、こうした中心都市に根差し、移動性の低下がみられるウラマー家系が主体となって行う、学問の旅の代替手段であった。

13世紀後半から14世紀前半にかけて生きたイブン・アル＝フワティーもまた、出身地と主な活動地域はバグダードであり、マラーガに滞在していた時期やイラン北西部を何度か旅行したことはあるにせよ、ハディースを求めて広範囲を旅するような学者ではなかった。しかし、ウラマーの行動範囲が一定地域内に限定されるようになった後も、彼らはしばしば他地域の都市の学者たちからイジャーザを得ようとした。イブン・アル＝フワティーは、上述のメッカ、ダマスクスからの他に、自身の赴いていない、モスル、ワースィト、エジプト、マルディンといった都市の学者からもイジャーザを送ってもらっていた⁽¹⁸⁾。同様に、メッカからイブン・アル＝フワティーにイジャーザを送ったムヒッブッディーン・アフマド・アッ＝タバリーもまた、彼が実際に赴いていないバグダードやシリア、エジプトにいた学者たちからイジャーザの送付を受けていた（*al-Iqd*, Vol. 3, 62）。

とりわけバグダードとダマスクスの間では、地理的に比較的近いことから、また両都市が学問的な中心地であったという点からも、特に数多くのイジャーザが交わされていたものと思われる。イブン・アル＝フワティーがイジャーザの授受を行っていた13世紀後半に限ってみても、ダマスクスの学者のうちでバグダードからイジャーザの送付を受けていた人物は枚挙に暇がない。学者の活動に関する同時代のバグダード側の史料が『ラカブ辞典』に限られているため、イブン・アル＝フワティー以外のバグダードの学者たちがダマスクスからどれ程イジャーザを得ていたかは定かではない。しかし、イブン・アル＝フワティーの場合を事例としたとき、ダマスクスの学者たちとのイジャーザ授受の記述の回数は14と、他の都市のそれを大きく上回っている⁽²⁰⁾。故に、イブン・アル＝フワティー以外のバグダードの学者にも少なからずこうした傾向があり、両都市の間で双方向的にイジャーザが送付されていたことが予想される。

13世紀後半という、ウラマーにとって旅の重要性が低下した時代にあっても、他地域の学者からハディースを獲得しようとする志向は残っていた。ウラマーは自ら旅をしてシャイフと面会せずとも、イジャーザの書面のみを取り交わすことでハディースを収集できた。すなわち、集団イジャーザは学問の旅の効

(17) 例えば、Berkey 1992, 31。

(18) モスルからは1281/82年に3人から（*al-Alqāb*, Vol. 4, 531-532; Vol. 5, 63-64, 102）、ワースィトからは1282年以前に1人から（*al-Alqāb*, Vol. 2, 66-67）、エジプトからは1284/85年に1人から（*al-Alqāb*, Vol. 5, 622）、マルディンからは1285/86年に1人から（*al-Alqāb*, Vol. 2, 518）、それぞれイジャーザが送られている。

(19) こうしたダマスクスの学者の例として、ビルザーリー（al-Qāsim b. Muḥammad al-Bīrẓālī, 1265 or 67-1339）と、前述のザハビーが挙げられる。サッラーミー（Muḥammad b. Rāfi' al-Sallāmi, 1305-70）の著した人名録『好んで選ばれるものの精選（*Muntakhab al-mukhtār*）』中の記述によれば、ビルザーリーはダマスクスに行っていないと思われるバグダードの学者5名からイジャーザを得ている（*Muntakhab*, 56, 64, 70, 72, 144）。同様に、ザハビーはイブン・アル＝フワティーの他に、少なくとも2名のバグダードの学者からイジャーザを得ている（*Mu'jam al-mukhtass*, 30-31, 144-145, 275）。

(20) 『ラカブ辞典』中には、イブン・アル＝フワティーが、ダマスクスから送られてくる集団イジャーザ請求に関して、「ダマスクスのイジャーザ（al-ijāza al-Dimashqiya）」と呼んでいる箇所がある（*al-Alqāb*, Vol. 1, 240）。このことは、ダマスクスからバグダードに送られてくる集団イジャーザの請求を、イブン・アル＝フワティーは、繰り返行われていたと認識していることを示しているだろう。

果的な代替手段となりえたのである。同時に、集団イジャーズによって他地域の学者たちに自身の学問的知識の正統性を認めてもらうことで、自身の活動する都市における学問的権威や社会的声望を高める効用があったと推測される。ウラマーの移動性が低下した後も、広い地域の学者たちからハディースを学ぶことへの志向は少なくとも一部に残っており、集団イジャーズはそれを実現するための効率的な手段であったと考えられる。

また、集団イジャーズは、都市の有力者たちが自身の家系を維持するために有効な手段であった。前節で述べたとおり、ダマスクスからバグダードへの集団イジャーズ請求は、ダマスクスの「識者たち、学者たち、貴顕たち、法学者たち」という、都市の知識人エリートとも言える人々が自身の子供たちにイジャーズを獲得させるために行われていた。これはダマスクスの知識人エリートたちが存命中に、子供に有利な学問的社会的条件を整えようとしたものであった。⁽²¹⁾ 彼らが共同で集団イジャーズ請求を行っていたことは、都市の知識人エリート層の形成・維持にもつながっていたと考えられる。集団イジャーズの授受は、ダマスクスの知識人エリートによるそうした子供たちへの権威付けの一端を、バグダードの学者たちが集団で担っていた可能性を示唆するものであり、両都市の知識人エリート層の間の結びつきが13世紀後半において緊密であったことを示している。

13世紀後半のバグダードが属したイルハン朝と、同時期のダマスクスが属したマムルーク朝の間の社会交流に関しては、低調であったという考察がこれまでの研究でしばしばみられた。ファン・エスや伊藤は、それぞれマムルーク朝の学者サファディー (Ṣalāḥ al-Dīn Khalīl al-Ṣafadī, d. 1363) とサハーウィー (Shams al-Dīn Muḥammad al-Sakhāwī, d. 1497) の著作中での引用文献を扱った論文の中で、彼らがイルハン朝下で書かれた文献を利用していないことから、マムルーク朝社会のイルハン朝社会に対する関心が低下していたと考察している (van Ess 1977, 105-106; 伊藤 1997, 30)。しかし、本稿で示した、バグダード・ダマスクス間で繰り返し集団イジャーズが交わされたという事実から、こうした考察は今後再考を要すると言えよう。

IV. おわりに

本稿では、今まで検討されることのなかった集団イジャーズの事例を『ラカブ辞典』の記述から取り上げ、その方法と背景を考察してきた。これまでみてきたように、13世紀後半にはバグダード・メッカ間、バグダード・ダマスクス間で、学者たちが個人または集団に対してまとまってイジャーズを出したり、都市の知識人エリート層が個人または集団に対してまとまってイジャーズを請求したりする場合が存在した。メッカからの事例では、バグダードでイブン・アル＝フワティーと交流のあった学者を仲介として、メッカの有力家系であったタバリー家の人物を含む一団がイブン・アル＝フワティーにイジャーズを送っていた。また、ダマスクスからの事例では、ダマスクスの知識人エリートたちが、自らの子供たちのために集団でバグダードの学者たちにイジャーズ請求を行っていた。

こうした集団イジャーズには、他地域の学者たちから効率的にイジャーズを得る手段として、また有力な学者たちが自らの家系と、都市の知識人エリート層を形成・維持する手段として、有効性があった

(21) ダマスクスの知識人エリートらが子供のためにイジャーズを求めていることについては、Chamberlain 1994, 88 を参照。幼児に対して与えられるイジャーズの有効性について、イブン・アッ＝サラーフは、子供が生まれる前であれば認められないが、生後に関しては認められるという立場をとっている (Muqaddima, 199; Introduction, 115; Robson 1960-61, 471-472)。

と考えられる。さらに、バグダードとダマスクスの間で集団イジャーザが繰り返し行われていたことは、イルハン朝領域とマムルーク朝領域の間の社会交流が低調であったとする従来の説への見直しをせまるものである。

今回集団イジャーザの事例を検討したことで、前近代イスラームの学術活動におけるイジャーザの役割について、新たな可能性を示すことができた。集団イジャーザが行われていたことは、対面教授を伴わない、書面によるイジャーザがいかにウラマーの学問的キャリアと家系の存続のために重要であったかを示すものである。しかし、イブン・アル＝フワティーが伝えるこれらの事例は、同時期、あるいは前後の時代でみたときにほんの一部のケースに過ぎないかもしれない。いずれにせよ、集団イジャーザがいつ頃始まり、どれ程の地域、都市で、どの程度の規模で行われていたのか、また集団イジャーザと対面教授で得られたイジャーザとはその価値に違いがあったのかといったことを明らかにするために、今後さらなる事例の検討が必要であろう。

参考文献

1) 一次文献

- al-Alqāb*: Ibn al-Fuwaṭī, Kamāl al-Dīn Abū al-Faḍl ‘Abd al-Razzāq b. Aḥmad, *Majma’ al-ādāb fī mu’jam al-alqāb*, 6 vols., ed. by Muḥammad al-Kāzīm, Tehran: Vizārat-i Farhang va Irshād-i Islāmī, 1995/6.
- al-Ḥuffāz*: al-Dhahabī, Abū ‘Abd Allāh Shams al-Dīn Muḥammad, *Kitāb Tadhkirat al-ḥuffāz*, 4 vols., Hyderabad: The Dairatu’l-Ma’ārifil-Osmania, 1956-58.
- Introduction*: Ibn al-Ṣalāḥ al-Shahrazūrī, *An Introduction to the Science of the Ḥadīth* (*Kitāb Ma’rifat anwā’ ‘ilm al-ḥadīth*), ed. & trans. by E. Dickinson, London: Garnet, 2006.
- al-‘Iqd*: al-Fāsī, Taqī al-Dīn Muḥammad b. Aḥmad al-Ḥasanī al-Makkī, *al-‘Iqd al-thamīn fī ta’rikh al-balad al-amīn*, 8 vols., ed. by Muḥammad Ḥāmid al-Fiḳī, Beirut: Mu’assasat al-Risāla, 1985/86.
- al-Islām*: al-Dhahabī, Shams al-Dīn Muḥammad b. Aḥmad, *Ta’rikh al-Islām wa-wafayāt al-mashāhīr wa-l-a’lām*, 55 vols., ed. by ‘Umar ‘Abd al-Salām Tadmūrī, Beirut: Dār al-Kitāb al-‘Arabī, 1987-99.
- Mu’jam al-mukhtaṣṣ*: al-Dhahabī, Shams al-Dīn Muḥammad b. Aḥmad, *Mu’jam al-mukhtaṣṣ*, ed. by Muḥammad al-Ḥabīb al-Hilā, Ta’if: Maktabat al-Ṣadiq, 1988.
- Muntakhab*: al-Sallāmī, Abū al-Ma’ālī Muḥammad b. Rāfi‘, *Ta’rikh ‘ulamā’ Baghdād al-musammā Muntakhab al-mukhtār*, ed. by ‘Abbās al-‘Azzāwī, Beirut: al-Dār al-‘Arabīya li-l-Mawsū‘āt, 2000² (1938).
- Muqaddima*: Ibn al-Ṣalāḥ, Abū ‘Amr ‘Uthmān b. ‘Abd al-Raḥmān al-Shahrazūrī, *Muqaddimat Ibn al-Ṣalāḥ fī ‘ilm al-ḥadīth*, ed. by Ṣalāḥ b. Muḥammad b. ‘Uwayḍa, Beirut: Dār al-Kutub al-‘Ilmiya, 2003.
- Ṣubḥ*: al-Qalqashandī, Abū al-‘Abbās Aḥmad b. ‘Alī, *Ṣubḥ al-a’shā fī ṣinā’at al-inshā’*, 14 vols., Cairo: Wizārat al-Thaqāfa wa-l-Irshād al-Qawmī, 1963.
- Talkhīs*: Ibn al-Fuwaṭī, Kamāl al-Dīn Abū al-Faḍl ‘Abd al-Razzāq b. Tāj al-Dīn Aḥmad, *Talkhīs Majma’ al-ādāb fī mu’jam al-alqāb*, 4 vols., ed. by Muṣṭafā Jawād, Damascus: Wizārat al-Thaqāfa wa-l-Irshād al-Qawmī, 1962-67.
- Trésors*: Muḥibb al-Dīn Aḥmad al-Ṭabarī, *Les trésors de la postérité ou les fastes des proches parents du Prophète* (*Dhakhā’ir al-‘uqbā fī manāqib dhawī al-qurbā*), ed. & trans. by F. Bauden, Cairo: Institut français d’archéologie orientale.

2) 二次文献

- Bauden, F. 1995: “Les Ṭabariyya: Histoire d’une importante Famille de la Mecque (fin XII^e-fin XV^e s.),” in U. Vermeulen & D. de Smet (eds.), *Egypt and Syria in the Fatimid, Ayyubid and Mamluk Eras: Proceedings of the 1st, 2nd and 3rd International Colloquium organized at the Katholieke Universiteit Leuven in May 1992, 1993 and 1994*, Leuven: Uitgeverij Peeters, 253-266.

- Berkey, J. 1992: *The Transmission of Knowledge in Medieval Cairo: A Social History of Islamic Education*, Princeton: Princeton University Press.
- Bulliet, R. W. 1983: "The Age Structure of Medieval Islamic Education," *Studia Islamica* 57, 105-117.
- Chamberlain, M. 1994: *Knowledge and Social Practice in Medieval Damascus, 1190-1350*, Cambridge: Cambridge University Press.
- DeWeese, D. 2006: "Cultural Transmission and Exchange in the Mongol Empire: Notes from the Biographical Dictionary of Ibn al-Fuwaṭī," in L. Komaroff (ed.), *Beyond the Legacy of Genghis Khan*, Leiden & Boston: Brill, 11-29.
- Ephrat, D. 2000: *A Learned Society in a Period of Transition: The Sunni 'Ulama' of Eleventh-Century Baghdad*, Albany: State University of New York Press.
- Goldziher, I. 1971: *Muslim Studies*, C. R. Barber & S. M. Stern (trans.), vol. 2, London: George Allen & Unwin. (*Muhammedanische Studien*, Halle: M. Niemeyer, 1889-90.)
- Iqbal, M. 1937: "Ibn al-Fuwaṭī," *Islamic Culture: The Hyderabad Quarterly Review* 11/4, 516-522.
- al-Jamil, T. 2004: "Cooperation and Contestation in Medieval Baghdad (656/1258-786/1384): Relationships between Shī'ī and Sunnī Scholars in the Madīnat al-Salām," Ph.D. Dissertation, Princeton University.
- Krawulsky, D. 2011: *The Mongol Īlkhāns and their Vizier Rashīd al-Dīn*, Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Makdisi, G. 1981: *The Rise of Colleges: Institutions of Learning in Islam and the West*, Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Robson, J. 1960-61: "Standards Applied by Muslim Traditionists," *Bulletin of the John Rylands Library Manchester* 43, 459-479.
- al-Shabībī, M. 1950: *Mu'arrikh al-'Irāq Ibn al-Fuwaṭī*, 2 vols., Baghdad: Maṭba'at al-Tafayyud.
- Stewart, D. J. 2004: "The Doctorate of Islamic Law in Mamluk Egypt and Syria," in J. E. Lowry et al. (eds.), *Law and Education in Medieval Islam: Studies in Memory of George Makdisi*, [Cambridge:] The E. J. W. Gibb Memorial Trust, 45-90.
- Vajda, G. 1975: "De la transmission orale du savoir dans l'Islam traditionnel," *L'Arabisant* 4, 2-8.
- van Ess, J. 1977: "Ṣafadi-Splitter: Teil 2," *Der Islam* 54, 77-108.
- Weissman, K. 1990: "Mongol Rule in Baghdad: Evidence from the Chronicle of Ibn al-Fuwaṭī: 656 to 700 A.H. / 1258 to 1301 C.E.," Ph.D. Dissertation, University of Chicago.
- 阿久津正幸 2010: 「知識を伝承し権威を継承する制度: イスナードの概念と専門職的知識人(ウラマー)に関する社会学的考察」『日本中東学会年報』26/1, 241-268.
- 伊藤隆郎 1997: 「サハーウィーの参照した歴史関連文献」『西南アジア研究』47, 22-38.
- 苗村卓哉 2010: 「15-16世紀東アラブ世界におけるアルド: イブン・トゥールーンの自伝・名士伝記集を中心に」『オリエント』53/1, 31-57.
- 森山央朗 2004: 「イスラーム的知識の定着とその流通の変遷: 10~12世紀ニーシャープールを中心に」『史学雑誌』113/8, 1-33.
- 森山央朗 2007: 「知識を求める移動: ハディース学者の旅の重要性の論理」メトロポリタン史学会『歴史のなかの移動とネットワーク』桜井書店, 83-115.
- 湯川武 1990: 「ウラマー遊学の世界」板垣雄三他(編)『歴史の中の地域』世界史への問い2, 岩波書店, 225-248.